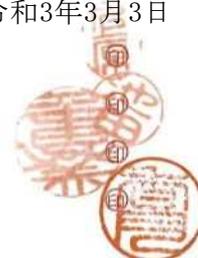


論文の内容の要旨および論文審査の結果の要旨

学位申請者氏名：岡本 隆寛 学位の種類：博士（保健福祉学）
学位記番号：博(健)甲第27号 学位授与年月日：令和3年3月3日
指導教員名：高崎健康福祉大学教授 上原 徹
審査委員：主査 高崎健康福祉大学准教授 池田 朋広
高崎健康福祉大学教授 千葉 千恵美
名古屋市立大学教授 香月 富士日



論文題目

統合失調症者のリカバリーに関連する心理社会的因子の解明

Elucidation of psychosocial factors associated with recovery of individuals with schizophrenia

【論文の内容の要旨】

日本の精神保健福祉改革にむけて、入院医療から地域生活中心へと基本理念が打ちだされ、統合失調症など慢性の精神障害を有する人々の地域移行・定着支援が推進されている。しかし、実際の統合失調症者の社会生活は、いまだ理想とは程遠い現状にある。こうした中、「障害を抱えながらも希望や満足に満ちた人生を送るための新しい目的と意味を創り出すプロセス(Anthony, 1998)」としてのリカバリー概念が注目されている。医学モデルのみに基づいた疾病治療の限界を超えて、統合失調症者自身が共生社会の実現に参画するために、リカバリーに関連する心理社会因子を明らかにし、保健福祉支援の向上につなげていく必要がある。本研究では、地域生活する統合失調症者のリカバリーにかかわる心理社会的因子を、二つの質的分析および実証的尺度を用いた横断的研究により解明することを目的とした。なお本研究は、順天堂大学研究等倫理委員会の承認(第 29-55)を得て行われた。

第Ⅰ章では、先行研究から地域生活する統合失調症者のリカバリー課題を抽出した。統合失調症者の地域生活の質（社会参加・人との繋がり・生きがいなど）が深くリカバリーに影響しており、社会参加状況の違いによりリカバリーに差が生じることが想定された。しかし、利用する福祉施設、保健医療サービスや就労状況によりリカバリーを比較した本邦の研究はなかった。そこで、統合失調症者の社会参加状況の違い、さらに一定の知見があるセルフスティグマや対人的情緒支援を含めて、リカバリーとの関連性を検討する必要があるという結論に至った。

第Ⅱ章では、地域商店街で荷物宅配サービスに取り組む統合失調症者が、地域住民とのつながりを通してリカバリーがどのように促進されたか、質的分析法（M-GTA）を用いて検討した。精神障害者就労継続支援 B 型事業所を利用する 9 名の面接を通し、リカバリーのコアカテゴリー【人とつながり語りあうことによる自分自身との和解】に至るプロセスが示された。《病気をクローズにすることによる負のサイクル》から《病気をオープンにすることによる正のサイクル》へと至り、支え合える仲間を受け入れられる安心感が障害受容につながっていた。さらに、一人の個人として希望や責任をもつことで《生きる主体としてのエンパワーメント》を獲得し、《豊かな人間関係の広がり》、《地域社会との和解》に

至っていた。地域住民とつながる体験を通して、セルフスティグマが軽減していくことが示唆された。

第Ⅲ章では、地域で生活する統合失調症者の利用する保健福祉施設・就労状況の違いやセルフスティグマ、対人による情緒的支援認知などの心理社会因子と、リカバリーとの関連性を多数例で明らかにすることを目的とした。デイケア、就労継続支援 A/B 型事業所、特例子会社を利用する 342 名（20～65 歳）を対象に、日本語版 Recovery Assessment Scale (RAS) によるリカバリーレベル（目標/成功志向/希望，他者への信頼，自信を持つ，症状に支配されない，手助けを求める）と Self-identified stage of recovery-A(SISR-A)によるリカバリーステージ（モラトリアム，気づき，準備，再構築，成長期）を評価し，Link スティグマ尺度 (Link)，情緒的支援ネットワーク尺度 Emotional Support Network Scale (ESN)，ピアサポート経験，趣味や楽しみ，病名開示などの個人属性との関連を検討した。統合失調症者のリカバリーレベルやステージは，利用するサービスや就労状況により差異がみられなかった。一方でリカバリーレベル (RAS 総得点及び下位尺度) は ESN や Link と有意な相関を示し，ピアサポート経験や病名開示，趣味がある群は各 RAS 得点が有意に高かった。SISR-A を用いた検討でも，リカバリーステージが上位の成長期群で ESN 得点が高く，Link 得点は低かった。重回帰分析の結果，デイケア/施設/職場や友人/医療者からの高い情緒的支援，低いセルフスティグマ，趣味，高年齢，初診年代の若さが統合失調症者のリカバリーレベルに有意に影響することが示された。就労の有無や利用施設の違いよりも，他者からの情緒的支援やセルフスティグマの軽減，趣味の持つことがリカバリーを促進する可能性が示唆された。

第Ⅳ章では，第Ⅲ章の結果を補完するために，個人の生活や主観性，価値観に配慮した検証を加えた。対象は地域で生活する統合失調症者 7 名で，対人情緒的支援やセルフスティグマの認知，趣味や楽しみが私生活にどのように影響しているのか，事例の語りについて質的記述的分析を行った。その結果，①情緒的支援を担う対等な仲間とのつながりや安心できる環境により，「ひとりの人」としての意識が深まり，リカバリーが促進された。②医療・施設スタッフによる「保護や管理」から，主体性を尊重してもらえる対等な関係性へ変化することにより，自己効力が高まりリカバリーが向上した。③居場所を見つけ，安心できる対人関係を再構築する体験が症状への自己管理能力を高め，セルフスティグマの軽減につながった。④趣味や楽しみは，喜びや気分転換を通じた心理的安定をもたらすとともに，日常で対人関係の質を高める共感体験の側面を有しており，リカバリー促進に影響を与えていた。

以上の質的研究および多数例による横断的観察研究の結果から，地域生活する統合失調症者のリカバリーレベルやステージの向上には，利用する保健福祉サービスや就労状況といった社会参加の一面をとらえるだけでは不十分であることが示唆された。むしろリカバリーを促進する因子としては，デイケア/施設/職場や友人/医療者からの情緒的支援を強く認知できるような居場所や関係性の役割，セルフスティグマを緩和する心理社会的バリアフリーの促進，趣味や生きがいを持てる機会や環境が重要であることが示唆された。統合失調症者の地域移行・地域定着を真のリカバリーへと結び付けるためには，単なる病床削減や一般就労という形式的目標を目指すだけでなく，地域社会の包容力により当事者のステ

イグマが軽減し、私生活が充実するようなリカバリープロセス全体を支援することが求められる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、系統立てた2つの質的研究と1つの量的研究により構成されており、充実した論が完遂されている。研究方法に大きな問題はなく、結果の解釈も妥当である。統合失調症のリカバリーに影響を及ぼす心理社会的因子を明らかにし、リカバリーを促進する支援のあり方を示している。精神保健福祉学領域では、大変優れたレベルの研究と言える。

1月28日（木）に、学位申請者による本論文内容のプレゼンテーションおよび3名の審査委員による質疑が、Zoomによる遠隔で2時間にわたり行われた。そこでは、実際に地域生活をする多数の統合失調症者に対する質問紙調査に基づく実証的な分析に、高い評価がなされた。特に、リカバリーを促進する因子として、①デイケア/施設/職場や友人/医療者からの情緒的支援を強く認知できるような居場所や関係性の役割、②セルフスティグマを緩和する心理社会的バリアフリーの促進、③趣味や生きがいを持てる機会や環境が関係することを明らかにしたことは、大きな成果である。これに基づき、少数の事例にインタビューをおこない、実証データをナラティブな解析でも追認検証したことは、優れた知見である。一方で、リカバリーの概念については、現段階において明確な定義化がなされていないという指摘もあり、本研究では、どういった先行研究をもとにリカバリーを定義したかについて議論がなされた。また、今後の課題として、これらの研究成果を実際の医療・福祉の現場でどう活用し、どのような次の研究や現場への介入につなげていくのかといった具体策についての指摘がなされた。最終報告会では、就労支援とリカバリーとの関連性や、統合失調症の認知機能の低下に対する改善療法等の知見とリカバリーとの関係性について質問がなされた。いずれも、専門家の立場からのリカバリーについて言及したものであり、パーソナルリカバリーの説明を以て回答された。

総括すると、主題設定は適切で興味深く、先行論文を充分総説し、対象と方法は妥当であり、得られた結果に基づく考察の論理的記述は適切であること、研究倫理上の問題はなく、質疑に対して今後の課題や展望、本研究の限界を明確に返答できていることが確認された。以上により、論文審査および最終試験の結果に基づき、審査委員会において慎重に審査した結果、本論文が博士（保健福祉学）の学位に十分値するものであると判断した。